

## 現代における民話

### ～形を変えても残るもの～

牧野 恵

まえがき

#### 1 商工会と元藤川における民話の形

##### 1.1 川根本町の民話事業の概要

###### 1.1.1 民話事業の内容

###### 1.1.2 商工会における民話

#### 2.2 藤川の人たちの民話の話

##### 2.2.1 語る場としての「生涯学習」

##### 2.2.2 生活の場の民話

#### 3 口承と語りの場

##### 3.1 口承としての民話の復興と現在

##### 3.2 民話の再話

#### 4 生涯学習

#### 5 まとめ・考察

あとがき

まえがき

民話とは民衆の間に言葉で語り継がれた話、および現在も語り継がれている話と定義される。元々英語の folk tale の訳語で民衆が口頭によって語り伝えてきた話の総和として民謡と相対する概念になった。ここでは川根本町元藤川の地域で昔から伝えられてきた話民話を取り扱う。

日本における民話は、高度成長期の 1970 年後半に一度その姿を消しかけた。しかし、伝統的なものの再発見・見直しから危機感を持った人々が民話運動を始めた。民話は口承芸能で伝える人がいなければ消えていってしまう。現代では語ったものを IC レコーダやテープで保存する技術があるが、民話と言うのは本来語るものである。現代は民話を残すという活動が盛んではあるが、本来民話は語る場と語る人と聞く人という三つの要素があって成立する。現代の地方の民話が消えつつあるのはその継承者がいないことが一番にあげられる。その理由として語る人つまり地域の老人が語る機会が無いこと、TV などが普及したお稽古などで子どもが忙しくなったため民話を聞く場、聞く人もいなくなったこともあげられる。

これらのことから川根本町の商工会で現在行っている民話事業と、以前から語られてきた元藤川の民話のあり方を比較して、現代における民話の意義を考えていく。

#### 1 商工会と元藤川における民話の形

ここでは、まえがきにもあったように川根本町（旧中川根町）で行われている民話事業と、元藤川での民話を比較して見てみる。まず最初に川根本町の民話事業を、次に藤川の例を見ていく。

## 1.1 川根本町の民話事業の概要

中川根町商工会では平成 11（1999）年から国の地域振興復興活性化事業で様々な活動を行ってきた。『くつろぎと団欒のある里』を目指し、『童謡と民話の原風景の残る里作り』をテーマに活動をしている。主には民話の再話と発掘を最初の二年間で行った。最初の三年間は事業費を国と町でからの支給金で民話の冊子作り、カルタ製作、民話のグループ、民話のイベントなどを行ってきた。その主な内容を次で細かく紹介していく。

### 1.1.1 民話事業の内容

#### 話楽座

旧中川根町商工会の女性部の方々がメインで作った民話を語る会「和楽座」は平成 13（2001）年に作られた。主に活動内容は旧中川根地区に残っている民話の語りで、民話のイベントや地元地域での周知を目的に精力的に行っている。地域づくりとしての民話を目的としているので、呼ばれた自治体や小学校の朝の時間などでも民話を語っている。また年に二度イベントも行っている。

この話楽座で語られている民話の特徴として、地元のオリジナリティを出すために自分たちで民話を集めて持ち寄って再話をしてから語りの形にすることがあげられる。民話の語りべで有名な遠野とは違い、一つの民話に対して語りべによって語り口が異なり、感情の入れ方も異なる。

#### 冊子

事業が始まって最初の二年間で民話の冊子を作成。民話は以前に商工会と地区の地区の人々で発行された「中川根の民話」をモチーフに、各自で中川根地区の高齢者や、自分が知っている民話を集めて持ち寄り、絵本作家の清水達也さんに依頼し物語の形にされた。この冊子は小学校にも寄付されている。

#### 民話かるた

前出の冊子に入らなかった話や、断片的でたくさんある民話をカルタと言う形で残した。カルタの絵は中川根地区の小中学校の生徒から募集し、色々な人に周知出来るよう工夫した。また使わなかった絵は展示会を行って利用している。



写真1 中川根民話かるた

## 民話イベント

商工会で行われているイベント「民話の里を訪ねて」は今年の平成 20 (2008) 年 6 月で 10 回になる。実際の場所で民話の語りを行う。またそのなかで中川根の名産物 (茶・季節の食べ物など) や商工会のもてなし (新茶体験) も行われる。私が実際に参加したイベントの概要を簡単に書いてみる。

「心のふるさとを訪ねて」というテーマで中川根商工会では民話のイベントを平成 12 (2000) 年から始めた。川根本町の茶銘館で 2 回 6 月と 12 月に行われる。イベントでは民話を語るだけでなく、中川根 (現在は川根本町) の観光案内にもなっている。私が実際に体験した民話の里を訪ねてというイベントの日程は以下の通りである。

- 10 : 30            茶茗館集合
- 10 : 30～11 : 10 茶茗館で新茶 (玉露) とお菓子のもてなし
- 11 : 20～11 : 50 バスで移動「ときどんの池」  
                    民話「ときどんと森ん段」  
                    民話「かくれ里の不思議」
- 12 : 00～12 : 15 バスで移動「あんけんさん」  
                    民話「あんけんさん」
- 12 : 20～13 : 20 昼食 (メニューは商工会の方々が作った山菜料理、中川根で食べられる  
                    ソーメンたれなど郷土料理)
- 13 : 30～14 : 10 バスで移動「崎平 八幡神社」  
                    民話「ひじり坊」  
                    民話「火くいばあ」
- 14 : 20～14 : 30 青部のつり橋
- 14 : 30～14 : 50 バスで移動  
                    ダムの説明
- 15 : 00～15 : 20 ハタマつり橋
- 15 : 30            茶茗館解散

イベントは題の「民話の里を訪ねて」の通り、実際の民話の舞台になった場所で語られる。また、民話だけではなく、川根本町の観光アピールにもなっている。もてなし、を大事にし、このイベントは訪れる人たちとのアットホームなコミュニケーションを重視していた。参加者の中にはこのもてなしを目当てに来る人もおり、田舎の郷土ならではのアットホームなもてなしを味わえるのはいいことだと多く聞いた。もてなしの主なものとして玉露の入れ方講座や、昼食のメニュー・参加者とスタッフ全員で食べる昼食などがあげられる。実際は雨天の可能性があったため徳山の公民館で昼食を食べることとなったが、最初の計画では「あんけんさん」の舞台でもある元藤川の河原で景色を見ながら食べるものであった。もてなしの中に多く川根本町の魅力を盛り込んで来る参加者たちをもてなしていることが良くわかった。

また、イベントに参加した人たちから話を聞くと、アットホームな会、田舎生活を感じられる、田舎のもてなし、何回か参加しているが毎回趣向 (民話の内容が変わってたりする) がこらしてある、などといった声が聞かれた。

私が参加してみて思ったのは、他の参加者たちと同じことだった。イベントの最後のほうにもなれば、同じバスの参加者たちと話すこともあったし、昼食で一緒に机を囲んだ人と料理について話したりもした。また、民話の舞台となった実際の場所で語られるのは、臨場感があり、その場所に愛着がわくような気がした。このイベントの参加者のリピーター率が高いのも、また訪れてみようかという意識がこういうところからくるのではないかと思った。

### 1.1.2 商工会における民話

話楽座のメンバーである川根本町商工会の中村さん（61歳 男性）と園田さん（58歳 女性）のお二人に、会で行っている民話の作り方と語り方の練習を尋ねた。その中で、今まで知らなかったような中川根の民話を知ることが出来、民話を語ることによって後世に残すことが出来る、と民話を通して得られるものが多くあるという。

しかしその反面、話楽座のメンバーに若い人がおらず、後継者を残さなければならないといった問題もあるという。また、再話をする事が出来ない断片的な民話に対して、残していきたいがどのような形で残せば良いのか、民話によっては話のバリエーションに色々あるためその全てを出来れば全部残したいがそうすればいいのか、と模索しているという。語る形にするために再話するので、元ある話に色をつけて膨らませてしまうことにも「いいのだろうか？」と迷うこともあるという。現段階では残すことを大前提として発掘されていない民話を発掘しているのだという。

中村さんと園田さんは中川根の民話観について、中川根の外に住む人たちが知らない話が多い、金持ちの話がない、子どもに聞かせられないくらい話が多い、と話していた。

語り方の練習では朗演エトピリカ<sup>1</sup>に所属している静岡の岡尾智津子さんと呼んで、一年間に12回の朗読と語りの練習を行っている。その中で出たのは自分が自信を持って語れば、聞いている人にも説得力ができるが、練習不足な時は特に子ども相手に語るのは怖いという。すぐに飽きた表情を見せる子どもは大人よりも手強いとも。

また中村さんと園田さんは語り部で有名な遠野と日本の神話や古文書で有名な出雲へ和楽座のメンバーと研修に行ったりなどもしており、旧中川根町の民話はどうのようにすべきかと試行錯誤されていた。また、静岡県で同じく民話の活動をしている佐久間町のやまんぼの会と袋井の会とで年に一度合同の発表会を行い、民話を通して他地域との交流も深めている。

これからの民話事業としては、保存として民話の語りをテープに取ったりビデオに残したりなども行っていく。その中で、話楽座で民話事業を続ける上で若い人たちに継続して活動をしてもらいたい、と話していた。また平成17（2005）年に本川根と合併し川根本町となった今「川根本町」としての民話にしていきたいと、語っていた。

<sup>1</sup> 1986年に静岡で発足。朗読と演劇をコンセプトにした朗演グループ。

現代における民話～形を変えても残るもの～



写真2 ときどんの池



写真3 崎平 八幡神社



写真4 民話イベント「民話の里を訪ねて」でもてなされたお昼

## 2.2 藤川の人たちの民話の話

私が藤川で聞き出せたのは断片的な話であった。その他には昭和 60 年に録音された民話のギラが強い語り口のテープと、藤川の区長がまだ藤川小学校があって自分が通っていたところに民話の教科書があった、そうだ。けれども教科書の方は古いのと自治体が先生が作ったものなのか、探し出すことは出来なかった。民話のテープはお借りして聞くことが出来た。また、民話と一緒に当時藤川に残っている数え歌やお手玉のときの歌もテープで保存していた。当時、中川根中学校の国語部が自分たちの住んでいる地区のことを調べたことが切っ掛けのようだ。

主に藤川で行われている語る場を生涯学習と民話に別けて以降の節で述べていく。

### 2.2.1 語る場としての「生涯学習」

藤川では平成 9(1997)年からの 3 年間、生涯学習としてその時の区長が歴史を題材に上げて、藤川で生まれ育った高本鷹一さん(現在 93 歳 男性)に講師を頼んだ。高本さんは定年退職を 60 で迎え、老後の楽しみと藤川の歴史を残さなければならないという思いから、藤川の史跡を歩いて周り藤川の歴史を自分なりにまとめあげた。一度はそれを全て破棄したものの、生涯学習で当時の区長に講師を頼まれ『藤川ふるさと』の冊子を作り生涯学習でのテキストにした。

高本さんを筆頭に旧中川根の中でも藤川は地元の歴史や民話・民謡などに興味を持っている人が多い、と商工会の方が語ってくれた。私も、高本さんが藤川の人に対して行った昭和 62(1987)年 7 月 27 日の講演会のテープを聞きこれほどまで詳しく個人で調べているのか、と驚いた。また、藤川には他にも地元の方言を学ぶ会や、藤川の昔の地区名を勉強する会などがあつた。

### 2.2.2 生活の場の民話

「あんけんさんは傷の神様で、傷を負った人が仏様になった」「恋の代は柏木さんという人を祭っているお祭り」「山犬の生き残りの遠吠えのことを龍音と聞いた」「すもうとりざん」「観音山」「のたぶりという坊さん」「平らになっている土地は城の跡だった」

これらの断片的な民話は、全て生活に根付いたところにあつた。地元の人しか分からない、もしくは地元の人でも分からないものもあつた。



写真 5 茶畑の中のあんけんさん(銀杏の木の右隣)

そういった状態だったので、藤川に伝わる民話の舞台は私にとって景色の一部に紛れ込んだものにしか見えなかった。しかし話を聞いてからもう一度同じ所を歩いてまわると、確かにそこに何があった、と思わせるようなものがあった。例えば、年に一度10月に祭りも行われる、あんけんさんと呼ばれる傷や出来物を治してくれる祠では、すぐ近くに民家があり最初は庭に入ってしまったのかと思っていたような場所だった。しかし、2回3回と訪れてみるとすぐそばに立つ古い銀杏の木が意味あるようなものに見えてきたりもした。



写真6 観天寺の柏木さんの祠

また、生活の場に根付いた藤川の民話の特徴として、各家ごとに話が少しずつ変わってきている、ということだった。例えば小井平の観天寺に祠がある恋の代は川島と柏木という男女の話ですが、話の元になった場所をもっと奥の山の方だ、川島は人ではなく土地の名前だ、川島は柏木が飼っていた犬を祭った場所だ、など色々なパターンがあった。名前が地名になったのか、またその逆なのかはわからないが、家の中で話されていくうちに形を変えていったのだと思われる。

3章と4章では口承としての民話と、民話の代わりに現れた語り の場としての生涯学習について述べる。

### 3 口承と語り

口承は字で残すのではなく言葉によって語り伝えていくものである。そのため性質として本来の元とは変化した形で語り伝えられたり、語り継ぐものがいなければ消えてしまうこともある。そこで重要なのが語りと行う場である。

はじめの章でも述べたとおり、日本ではこの口承文学の筆頭としてもあげられる民話が姿を消しかけた。この章では民話の現在の形を語りを中心に見ていく。

#### 3.1 口承としての民話の語り

民話の語りべとして有名な地域に遠野がある。柳田國男の『遠野物語』が有名な遠野は語りべに民話を語らせるとき、一言一句全く変えずに語らせる。遠野の民話という決まった形でもらさず残すことを原則としている。しかし、他の地域を見てみると語り方は様々で、今回の話楽座で行っているように語りべによって語り方だけではなく内容も少しずつ変えたりする場合もある。この場合は話の大筋を残すことを基本として、地域一般に残すことを原則としている。

現在の民話の語りべは大きく分けてこの2つである。前者は外部の人間へのアプローチが大きく、後者は内部の人間へのアプローチが大きく感じる。一言で言えば観光資源になりやすいか、そうじゃないかの違いである。両者とも本来は同じ性質を持つものであったはずなのに、知名度という点において差が出てきてしまう。

しかし、両者に言える共通のことは語る相手と場所だ。本来民話は地域の特徴が出て、戒めや慣例などを含む話が多いことから、家の中や祭りなどの集まりで子供に対して行われるものだった。けれども現代では少子化で語る相手がいなくなり、TVやコンピューターといった様々なメディアの影響で家にいる語りべ、つまり高齢者の語りべが必要とされなくなっている。

そのため民話の語りべは語る場所を作らなくてはならなくなった。これはどこの語りべに対しても言えることであろう。文字で民話を残しても本来の語りという形でなければ民話は本来の良さが半減する。語りべが続いていくことは民話にとって重要なことだといえる。

次の節では現代における民話で重要とも言える再話について述べる。

### 3.2 民話の再話と復興

民話などの口承文学は1970年ごろにピークを迎える高度成長の時代に衰退し、その反動で復興活動が始まった。衰退した民話は地域によっては語る人がいなくなってしまう。語るものがいなくなれば口承で伝わる民話は、途中で抜け落ちたり消えてしまうものもある。こういったものを再編成し、断片的に残ったものをひとつの話にするのである。

一言一句違わずに語り伝えるような厳密な口承文学ではない民話が、これまでも様々な人の口を通るたびに形を変えてきただろうことが考えられる。ある意味自然に再話されていた、と考えれば違和感はないように感じる。

しかし、実際に話楽座の語りべの方の中からは本来の形を変えてもいいのか、色々なバージョンがある、という言葉も聞こえた。地域の中で語る上では、時代に即した語られ方もいいのではないかと思う。

## 4 生涯学習

藤川の高齢者の中には民話を知っていてもそれを語る場所がない、語る相手がいない、語らないうちから忘れてしまった、と言う方々多くいた。

藤川では平成十年から国から推進されて生涯学習が始まった。語る場を失った高齢者の人たちのために、各地で長寿大学や生涯学習を地域ごとに行っている。そこで自分たちが知っている知識を本としてまとめたり、語る場が作られるようになった。この生涯学習推進体制は、人々の生涯にわたる学習を支援を奨励するための組織体制日本である。この地域の生涯学習が言われるようになって、その取り組みが本格化したのは昭和56年(1981)年の中教審答申「生涯教育について」の中である。しかしそれ以前の1960年代後半から秋田県や兵庫県のように取り組み始めたところもある。

藤川の例で言えば、平成2年(1990年)の中教審答申「生涯学習の基盤整備について」の補助事業「生涯学習の町づくり」による取り組みが大きい影響だと思われる。それ以前にも2.2.1で述べたとおり昭和62年に高本さんが藤川の歴史について講演会を行っているので、藤川で生涯教育が行われていたことがわかる。



## 5 まとめ・考察

民話はかつて地域に根ざしたもので、生活の中に存在していた。多くは仕事を次世代に譲った高齢者が子ども達に語るもので、多くの教えや知恵を含んでいた。しかし、現代では民話に代わる娯楽が増え、余暇の過ごし方が変化してきた。

元藤川の方々から聞いたのは、孫がTVやゲームで遊んでいて昔自分たちがやっていた川遊びなどをしなくなったという。また以前に比べて学校に縛られる時間が増えたことも言う人がいた。そのため、世代間を超えての会話が減り、口承で伝えていく民話や数え歌などが次の世代へと伝わり難くなった。また、元藤川の地域では大井川で遊ぶことが多かったが、上流にダムが建設されてからは水量が減り、河原に出来る水溜りが出来なくなった。そのため以前遊んだ遊びが出来なくなったというが、そういった自然環境の変化を除いても民話の語られる場は変化しただろう。

旧中川根町商工会の話楽座の例で言えば、現代の民話を語る場は家や近所から学校、イベント、観光、史跡といったもっと広範囲な場で語られている。また、そこで民話を聞く人たちは学校を除き、地域や地元の人ではなく静岡の県内であっても電車で乗り継いでくるような外の人たちである。外から中川根町の民話を聞きに来る理由としては、田舎の雰囲気を楽しみたい、といったノスタルジアを感じるため、ということを多く聞いた。

また、商工会側でも地域のために民話を後世に残していき、民話という観光資源で地域振興も行える。民話のイベントでは民話だけでなく中川根町のアピールとしてお茶や山菜料理のもてなしも行っていた。

しかし高齢者の中には民話はその土地に住んでいてあって当たり前のもので、けれども語る場がないから忘れてしまう。日常生活の中、例えば畑に行く途中の平らな所に昔城があったらしい、など生活の風景に溶け込んでしまっている。はじめてその土地を訪れる人にはどこが史跡なのか説明を聞くまで見当もつかない。しかしそこに住んでいる人にとっては意味があるものだと、話を聞くたびに感じた。

民話を残していこうとする人たちには若い層が少ない気がした。川根本町商工会、藤川、そして遠野でも語りべに若い人たちの姿が見えない。元々年寄りが子どもにするもの、という意識が以前からあるからなのか二十代、三十代の人が少ない。そして今の民話を語る人たちもその地域の共同体全体の意思、というよりは個々人の意識のレベルの問題になっている。本来の民話の形とはほど遠いと最初に調べていて感じた。若い人で自分の地域に愛着をもって居つくことのほうが珍しくなってしまった。けれども高齢者の生涯学習や、地域の復興といったことで民話が残っていている。藤川では生涯学習を教える立場の人や、教わる立場の人がほとんど近所の知り合いである。これから教わりに行くのだと言っていた女性はとても楽しそうに見えた。

民話を通してだが、地方の藤川のような中の人々が閉ざされた、という意識を持つような場所では高齢者が進んで外へ出られるような地域づくりが大切なのではないかと思った。高齢者の生涯学習の内容や、話楽座の再話した民話などを次の世代にどのように残していくのが今後の課題だと思う。

### 参考文献

中川根のむかし話編集委員会（編）

1988 『中川根のむかし話』 中川根町教育委員会

川森博司

1999 「遠野の語り手たち—伝統的語りの現代の変容—」 『現代語り手論 昔話—研究と資料 27号』  
三弥井出版

### 参考資料

中川根町商工会

2002 「中川根民話カルタ」

### 参考にした HP

井上講四

『生涯学習推進体制』（2008年11月参照）生涯学習 e 辞典 <http://ejiten.javea.or.jp/>